



Veritas No.35(2007.7.19)

目次 (敬称略)

<近代日本と中国 — 孫文が残したメッセージ —>

真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

長尾 ひろみ (英文学科)

浜下 昌宏 (総合文化学科)

石川 康宏 (総合文化学科)

三杉 圭子 (総合文化学科)

小林 哲郎 (心理・行動科学科)

井出 敦子 (院長室職員)

<研究室から>

米田 眞澄

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (8)>

松村 昌家

無断転載を禁ず

〈近代日本と中国 — 孫文が残したメッセージ —〉

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

兵庫開港以来、神戸港は「アジア貿易の拠点」として急成長し、1924（大正 13）年には、日本の対中国貿易総額のおよそ 6 割を占めた。こうした貿易活動などを通じて、多くの中国人が神戸に往来するようになった。

グループ

神戸市立中央図書館のある大倉山公園の南、神戸文化ホールの側に、中国革命の父として有名な「孫文」の胸像（→写真参照）が建っている。



1895 年、29 歳のときに初めて来日した孫文は、その後、1911 年の「辛亥革命」を はさんで前後十数回も神戸を訪れたが、1913 年に第二革命が失敗して日本に亡命した。ときの兵庫県知事・服部一三は、失意の孫文を慰めるために一席を設け、

踏まれても なお萌えいつる春の野の

若菜や やがて花ぞ咲くらん

の短歌を贈ったという。

最後の訪日は、死の前年の 1924（大正 13）年、11 月 22 日に夫人の宋慶齡とともに上海を出発し、24 日長崎経由で神戸に着いた。このとき、孫文は有名な「大アジア主義」についての講演を行なった。当時竣工したばかりの県立神戸高等女学校（現在の兵庫県庁一号館敷地）で 11 月 28 日に行われた講演には、約三千人もの市民が詰めかけ、熱気につつまれた。まず、神戸商工会議所会頭の滝川儀作が挨拶し、「東洋の平和は、中華民国と日本の完全なる対等同盟関係によって解決される」と語った。いよいよ孫文が登壇し、二時間にわたり熱弁をふるった。神戸商業会議所など 5 団体が主催し、一般市民を対象としたこの講演は、中国語で行われ、随行した戴季陶によって日本語に通訳された。そ

の結びで、孫文はこう語った。

「今後、日本が世界の文化に対し、西洋覇道の獵犬となるか、あるいは東洋王道の干城（かんじょう）となるか、それは日本国民が慎重に考慮して選ぶべきであります」。

わかりやすく言えば、日本は西洋のような軍事力・経済力などの物質的な力で他を圧倒する国になるのか、それとも東洋的な精神や文化の力をもって世界から尊敬される国となるのか。これが、日本人に残したメッセージであった。翌年病床についた孫文は、この言葉が日本人にどう理解されたのか、最後まで気にかけていたという。

その後、日本はアジア侵略の歴史をつき進み、孫文が説いた「東洋王道」の理想は残念ながら実現しなかった。さらに第二次大戦後の日本は、東西冷戦構造のもとでアメリカの外交戦略の一環に組み込まれ、「西洋覇道」に追従していった。

国境を越えた地域間交流が進むヨーロッパのように「東アジア共同体」の構築が模索され、その必要性が高まりつつある今日、日本外交の軸足がアジアから離れてしまうことへの不安は大きい。「西洋覇道の獵犬」になる危険性を避け、アジアとの平和共存のための外交がいま求められている。歴史の連鎖的視点から〈過去―現在―未来〉を展望するとき、孫文が日本人に問いかけたメッセージは、今日になお生きていると言えよう。

学生の皆さんには、大学図書館の豊富な蔵書を夏休みにぜひ活用していただき、国内や海外に旅する機会があれば、日本とアジアの未来に思いを寄せてほしいと願っている。

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

長尾ひろみ 英文学科教授

★遠藤周作『沈黙』

現在、日本におけるキリスト者の数は人口の1%に満たない。しかし、神戸女学院のようなミッションスクールが全国にあり、日本人の60%が幼稚園から大学院の間で、キリスト教に触れた経験を持っているといわれている。それは100年から150年前に、キリスト教の宣教師が主にアメリカから派遣され、ある意味命がけでキリスト教を教育という土台の上で広めようとしたからである。

それよりももっと前、つまり初めてキリスト教が日本に紹介されたのは言うまでもなくザビエルの時代であり、織田信長の時代には外の世界に魅了され宣教師を受け入れたのであるが、一時期、京都の人口の半分がキリシタンになったと聞いたことがある。その後、豊臣秀吉の時代にはキリスト教の威力を恐れ、キリシタン禁制が発令されることになる。

そんな中、『沈黙』の主人公である神父パードレーは日本にやってくるのである。小説の中に足を踏み入れてみよう。

密入国したパードレーは役人に追われ苦労しながら長崎に向かい、そこでつかまり踏み絵を強られる。もし彼が踏み絵を踏まなければ、逆さ吊りにされて水につけられる日本人キリシタンの拷問は解かれないという状況で、このパードレーは神と会話をする。そして踏み絵を踏むのである。

この小説はフィクションであるが、遠藤周作の作品は歴史を研究した上で主人公をその場面に乗せていっているから面白い。その中で、パードレーを助けながら、信じるといいながら、自分が捕らえられそうになると簡単に裏切ってしまう男がいる。まるで影のようにパードレーを追いかける。その中に私は「人間」を見る。人間だから完璧になれなくて人を裏切る。でもまた後悔し悔い改める。神には『許し』があり、人はまた生きてゆくことができる。パードレーもまた、人のために神を裏切り許しを乞い求めて生きてゆく姿が心にしみる。

この『沈黙』は、英語に翻訳されている。私は日本の歴史に興味のある外国の人には是非読んで欲しいと推薦している。英語に興味のある人はこの英文翻訳を読んでみるのも面白いのではないだろうか。

浜下 昌宏 総合文化学科教授

★ポール・ヴァレリー『ムッシュー・テスト』（清水徹訳、岩波文庫）

かつて私はヴァレリーから、知性にも感受性という繊細さがあることを学んだ。粗雑な論理と不実な言語遊戯が跋扈する今日、あらためて自分の思索を精妙にする努力が必要だろう。そのための必読本がこれ。

★銭鐘書『結婚狂詩曲』（原題は「困城」）上・下（荒井健ほか訳、岩波文庫）

ロシアに脅威を感じる者もドストエフスキーやチェーホフを読めば、その魅力を解するよう、現代中国に敵意を感じても、このような本を読めば、中国人知識人のふところの広さや人間観察の目の確かさをあらためて知り、さすが十億余の民からはこういう偉大な作家・作品が生まれることに感嘆するだろう。

★『谷崎潤一郎随筆集』（岩波文庫）

慧眼かつ教養ある作家にかかるとどんな瑣末なトピックもゆたかな人生への導きとなる。所収の「私の見た大阪及び大阪人」なども、東西の美意識や所作の違いについての鋭い比較観察から、今日の関西低迷の原因すらも示唆されているように思える。

石川 康宏 総合文化学科教授

★神戸女学院大学石川康宏ゼミナール『「慰安婦」と心はひとつ 女子大生はたたかう』かもがわ書店 2007.6

かつて日本軍が、数万から20万といわれる女性を「慰安所」に監禁し、数カ月から数年に渡るレイプを繰り返した「慰安婦」問題が、あらためて大きな話題となっています。6月26日、アメリカ下院の外交委員会で、この問題についての日本政府の態度を批判する決議が可決されました。その議論の中で、誠実な謝罪と問題解決への努力をしようとしていない日本政府の姿勢は、ナチスによるホロコースト（大量虐殺）の加害を乗り越えようとしてきた、戦後ドイツ政府の姿勢との際立った対照のもとに語られています。

この決議は外交委員会だけにとどまらず、下院の本会議でも可決される見通しです。いまのところ安倍首相は「よその国がやっていることだ」とばかりに静観の構えを見せてい

ますが、本会議での可決となれば、いつまでもそうした態度で事態をやりすごすことはできなくなってくるでしょう。可決の時期は、参議院選挙投票日の直前になるともいわれており、それは日本の選挙結果にも大きな影響を与える可能性を秘めています。

さて、ここに紹介する『「慰安婦」と心はひとつ 女子大生はたたかう』は、この「慰安婦」問題での学びと学生たちの取り組みの様子を記録した、石川ゼミからの3冊目の本となっています。1冊目が『ハルモニからの宿題』（2005年、冬弓舎）、2冊目が『「慰安婦」と出会った女子大生たち』（2006年、新日本出版社）、そして、この6月に出版されたばかりの3冊目がこの本です。これまでの2冊と比べてみると、今回の本は学生たちの「行動」に焦点をあてたところが大きな特徴となっています。

本の構成を紹介しておきましょう。

「座談会 私たちはなぜ行動するのか？ そのきっかけは何？」（3年ゼミ生）

「学び、感じ、考えること 私のゼミ論と実践」（石川康宏）

「わかものが政治に目覚めるとき」（槇野理啓）

「安倍首相の『慰安婦』発言徹底批判 事実も道理も無視し、世界から孤立するもの」（石川康宏）

最初の3編が「行動」する学生たちの分析となっており、その後の1編は、安倍首相による「狭義の強制性はない」「（アメリカ議会が議決しても）謝罪の必要はない」という3月の発言を、事実認識の誤りとその無責任な姿勢の両面から批判するものとなっています。

今回の本のメインとなるのは、冒頭の学生たちによる座談会です。それは学生たちが「行動」する自分たちを、あらためて冷静にふりかえったものとなっています。ここで「行動」というのは、「慰安婦」問題の解決を訴える学生による講演や発言の取り組みのことです。この本の「はじめに」には、奈良・大阪・神戸・香川など、すでに行われてきた13カ所の発言先が紹介されていますが——うち3ヶ所は大阪と兵庫の高校でした——、この7月までに、その数は16カ所にふえています。そして「学生さんの話を聞きたい」と私のところに入る外部からの依頼は、すでに年末の日程にまでおよんでいます。

3年生の4月にゼミに入ったときに「慰安婦」問題をほとんど知らなかった学生たちが、なぜ半年後には、たくさんの高校生や大人の前で、問題解決の必要を訴えるまでに変わったのか。その内面の変化は、じつに興味深いものです。

石川ゼミは毎週のゼミが5時間におよぶという「スパルタ」ゼミですが、その長い時間の中で、学生たちは問題にかかわる疑問を自分で立て、そして、その疑問を自分の力で解決していく努力を重ねます。そこで行われる学びは、教師の意見を鵜呑みにすることなど

ではありません。あくまでも自分のアタマで考えること。それは本来自発的である「学び」の本来の姿とっていいでしょう。そのような経路をたどって、自分なりに納得のいく結論が得られたからこそ、学生たちには各地での「行動」を生み出す強い内的な力が生まれてきます。

これは、大きな本ではありません。100ページをようやく超える程度の分量です。ぜひ、自分の目で、同じ大学に学ぶその学生たちの生き生きとした姿をながめてみてください。

今年も、9月10日（月）から13日（木）まで、今度は、この本をつくった次の学年の学生たちが、日本軍「慰安婦」歴史館に学び、元「慰安婦」被害者に会うために韓国へと渡ります。「私も行ってみたい」「旅行のことを詳しく聞きたい」という方は、石川まで気軽にメールをしてください。

みなさんの「夏休み」が、充実したものとなることを願っています。

三杉 圭子 総合文化学科教授

★ Ursula K. Le Guin The Books of Earthsea. 6 vols. Ace, Putnam, 1968-2001

アメリカの作家アーシュラ・K.ル＝グウィン(1929-)の壮大なファンタジーで彼女の代表作です。架空の“Earthsea”を舞台に魔法使いや竜が登場して物語が展開します。これまでに6冊が出版されています。

スタジオ・ジブリが昨年公開したアニメーション映画『ゲド戦記』の原作シリーズで、清水真砂子訳（岩波）もあります。映画は未だ観ていないのですが、原作とは随分異なると聞いています。

時間のある時にゆっくりファンタジーの世界にひたるのは楽しいものです。しかしル＝グウィンは、決して絵空事ではなく、私たち人間の本質を描き、Earthseaの物語は、私たちが生きる社会の鏡として読むこともできます。いろいろなレベルの楽しみ方があります。

同じく映画になったファンタジーの傑作 R. R. Tolkien の The Lord of the Rings 『指輪物語』(1954-55) も大好きなのですが、原文も訳本もかなり言葉が難しいので、より親しみやすいル＝グウィンの作品を夏休みにはお勧めします。とりあえずの方には日本語訳も良心的です。

アーシュラ・K.ル＝グウィンの公式サイトはこちらです。
<http://www.ursulakleguin.com/>

Wizard of Earthsea 『影との戦い』 (1968)
The Tombs of Atuan 『こわれた腕輪』 (1970)
The Farthest Shore 『さいはての島へ』 (1972)
Tehanu: The Last Book of Earthsea 『帰還 -最後の書』 (1990)
Tales from Earthsea 『ゲド戦記外伝』 (2001)
The Other Wind 『アースシーの風』 (2001)

小林 哲郎 心理・行動科学科教授

「カウンセリングに興味のある人の3つの選択」

夏休みは、まとまった時間があり、じっくり本を読むのには絶好のチャンスです。そこで、私の専門領域の臨床心理学を学ぶ人や他領域でも興味のある人にお勧めのカウンセリング(サイコセラピー)関係の本を3冊紹介します。ただ、本を読むのはめんどくさいとか、本読むくらいならDVD見たいという人もいるでしょうし、専門ではないがちょっとかじってみたいという人もいますので、入門からマニア向けまで松・竹・梅の3コースを用意してみました。

1. 松(初心者コース)

★佐治守夫・飯長喜一郎編『ロジャーズ クライアント中心療法』 有斐閣 1983(有斐閣新書)

この本は、クライアント中心療法を提唱したカール・ランソム・ロジャーズの生い立ちから、彼が非指示的カウンセリングの技法に至る経過、その後の活動や、彼の考え方などをコンパクトにまとめたものです。

我が国でのカウンセリングの理論や実践的技法については、彼の考え方に負うところが

多く、他の理論や技法でも、話を聴く態度においては、彼の考えを支持する人が多いと思います。

新書ですので、寝転がってボサノヴァ（夏の昼寝にはぴったり）を聞きながらでもいけますし、クラブや勉強に向かう電車の中でも読めます。新書の大きさは、バッグにも入るし、ジャケットのポケットでもOKです。お手軽に、ロジャーズの考えを理解し、知ったかぶりができる一冊です。

2. 竹コース（中級者コース）

★カーシェンバウム・ヘンダーソン編 『ロジャーズ選集』上・下 誠信書房 2001

この本は、カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文という副題のついた上・下二巻の単行本です。非指示的アプローチの位置づけ、パーソナリティの変化に必要なして十分な条件、十分に機能する人間などのロジャーズの考えの本質的な部分について、学ぼうとする人は一読することを勧めます。ロジャーズの考えをきちんと理解して、文献として引用するには必携の本でしょう。知ったかぶりではなく、人と議論するにはこの程度の知識が必要です。

ただ、寝転がっても読めますが、音楽やテレビを消した方が理解しやすいと思います。すこし、マジで勉強しようという人向けです。学部生、院生でカウンセラー志望の人には興味深いでしょうし、ロジャーズの考え方がよくわかると思います。

3. 梅コース（マニアコース）

★アンリ・エレンベルガー 『無意識の発見 ～力動精神医学発達史～』上・下 弘文堂 1980

この本は、私の好きな本の一つです。原始的な憑依、呪術による治療から始まり、催眠術につながるメスメル、ジャネ、フロイト、アドラー、ユングと精神医学の壮大な歴史をひもといた本で、上下巻で 1000 ページを超える大著です。エレンベルガーはこれぞ研究者といえるような綿密な資料の分析により、歴史的背景や流れをわかりやすく描写し、無意識の世界を探求した人々の考えを詳細に紹介しています。また、監訳者の木村敏、中井久雄の両氏も博学の秀才であり、彼らのチェックした正確な訳（私自身は原著を読んではいないがそう信じている）は、原著のニュアンスや迫力を確実に伝えているように思います。

ノンフィクションでありながら、壮大な歴史小説の様な読み応えがある名著だと思います。本好きの人が読み出したら、たまらない面白さがあるでしょう。

ただし、この本は寝転がって読むことはお薦めしません。重いので、手が滑ると顔をけがする危険があります。取り扱いにご注意下さい。

では、楽しくて有意義な夏休みをお過ごし下さい。

井出 敦子 院長室職員

このたび、神戸女学院校舎棟（講堂・総務館、文学館、理学館、図書館本館、音楽館）が、適切な維持保全がなされた良好な建築物として、社団法人建築・設備維持保全推進協会の第16回BELCA賞（ロングライフ部門）を受賞いたしました。

ウィリアム・メレル・ヴォーリス博士が「永年の間に人々の心の内部に洗練された趣味と共に美の観念を啓発する」（同窓会誌『めぐみ』22号1933.7）ようにと設計したこの岡田山キャンパスが、第二次世界大戦、阪神淡路大震災を乗り越えて、今も校舎として大切に利用され、そして「73年の時間の中で見事に成熟した教育環境となっている」（選考委員会副委員長の三井所清典氏の講評）と評価されたことを、この学院に連なる一員として大変嬉しく思っています。

そこで、今回はみなさまにキャンパス探訪入門編のお供として、神戸女学院が発行した資料を紹介させていただこうと思います。

★『岡田山の五十年』 1984 (374.75/KO1BA)

岡田山校舎落成50年を記念して刊行された本。なんと言っても目玉は幻のお宝ブック、落成年刊行の『新築記念帖』が復刻されていること。読めば、どれほど多くの方々の祈りと献身と好意の上にこのキャンパスが存在するのかがわかり、そしてそれがそのまま「キャンパスみどころ案内」に。巻末には神原浩先生（旧教員）筆、図書館本館ロビーの模型でおなじみの神戸山本通旧校舎のエッチングも。

★『岡田山の自然一六甲山東麓の生物とその生態』 1974 (570/KO1)

岡田山の自然の恵みが味わえる本。同窓生筆の野鳥の絵をお見逃しなく。個人的には神戸女学院移転前の岡田山の写真が掲載されていることも嬉しい。

★『神戸女学院の125年』 2000 (374.75/KO1CM)

1875年創立以来の学院の歴史をひもとくのならまずこの本を。

<研究室から>

米田 眞澄 総合文化学科教授

「変わらないということ」

本学に勤めはじめて3回目の夏を迎えようとしています。緑深いキャンパスのなかには町中よりも涼しさを感じます。着任した2005年は、神戸女学院創立130周年という記念すべき年でもありました。創立130周年の記念行事として11月には映画「ベアテの贈りもの」の上映と、この映画作成のための委員会代表の赤松良子先生のご講演がありました。

私は、大学院生の頃から赤松先生にお世話になっておりましたことから、本学で赤松先生にお会いできることを楽しみにしておりました。赤松先生は神戸女学院大学（当時は神戸女学院専門学校）に学生として通われておられたことがあります。お会いした時に「神戸女学院の校舎はあの頃と変わらないまま美しいわね」とおっしゃられた言葉がとても印象的でした。赤松先生は今年の夏にお元気に喜寿を迎えられました。最初にお会いしたときと変わらず、先生は今でも颯爽としてカッコいい先生です。

考えてみると、「変わらない」ということは大変なことです。何もしなければ「変わっていく」ことの方が自然だからです。変わらないためには強い意志と相当の努力が必要です。「ベアテの贈りもの」は日本国憲法の男女平等に関する規定を起草したベアテさんとその後の日本に住む女性たちの男女平等へのたゆまぬ努力を描いています。この映画上映は学生に日本国憲法の大切さについて考える機会を与えてくれたように思います。

日本国憲法といえば、本年5月には日本国憲法の改正手続を定めた国民投票法が可決、公布されました。国民投票法は一部を除き公布から3年を経過した日から施行されます。早くて2010年です。私は法学関連の授業を担当していることから、すべての授業で国民投票法の公布について学生達に話をしました。「国民投票法」が公布されたことを知っている学生は多かったのですが、憲法9条改正のための法律であると思っている学生も少なくありませんでした。「あたりずとも遠からず」ではあります。そこで憲法9条についての裁判例や学説、政府見解の推移などを授業で取りあげました。みな、熱心に聞いてくれました。

戦後60年以上経った今日まで、日本が武力紛争を起こさず、あるいは武力紛争に巻き込まれずに来たこと、戦後変わらずに平和愛好国であるという事実は、憲法9条の果たしてきた役割の大きさを物語っていると思います。憲法9条をめぐる憲法改正論議は、今後も盛んに行われていくでしょう。議論することはよいことです。議論するためには考えなければなりません。自分なりの考えをもつためには、さまざまな学びが必要です。憲法9条に関する本の出版も相次いでいます。夏休みに一冊読んでみるのもいいのではないのでしょうか。

<史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

「神戸女学院のロングセラー」

神戸女学院には 117 年もの間継続して発行されている冊子があります。その本のタイトルは『めぐみ』一同窓会誌です。現在は「同窓会」といわず、「神戸女学院教育文化振興めぐみ会」と名乗っているのですが、『めぐみ』はその広報誌ということになります。

この本の発行を決めたのは、エミリー マリア ブラウン先生（Miss Emily Maria Brown）、神戸女学院の 3 代目の院長です。創刊号（1890 年 8 月 30 日発行）で先生はこの本の目的を次のように語っています。

この本は何かを声高に主張しようというものではなく、学生たちの文筆活動を応援するのが目的である。とはいえ、ペンによって自分たちの国の役に立とうとしている日本の少女たちの努力に関心を寄せてくださるすべての人の寛容な思慮と励ましを期待している一と。

この言葉どおり『めぐみ』には毎回、学生・生徒の寄稿文がたくさん掲載されています。学校での出来事、自分の意見、創作文など、当時の学生たちの考え方や感性、時代性などを知ることができ、文芸誌的な読み物としても楽しめます。また、「同窓会誌」として卒業生の動向を知ることができる上に、学校全体の動きを記録している「学報」の機能もあるので、学院史を知る上での一級の史料としても利用できます。

ブラウン先生、そして同僚であり次の院長になるソール先生（Miss Susan Annette Searle）のお二人は、学校を女子の高等教育の場にしようと尽力されましたが、その一方で、卒業生とのつながり（特に精神的なつながり）も大切にされました。忙しい授業の合間を縫って、暇を見つけては、卒業生の家庭訪問に出かけられ、同窓会にも顔を出していらっしゃいます。

文芸誌的な本として始まった『めぐみ』ですが、卒業生に学校の現況を定期的に知らせるという大切な役目を担っていました。それによって学校と関わりのある人すべてと連帯感を持ち続けたいという先生方の願いがかないませんでした。

先生方の気持ちは今につながっています。古い雑誌の中にも今と変わらぬ学生生活があります。先輩方の声に耳を傾けてみませんか？ 図書館で皆さんのお越しをお待ちしています。

< ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (8)

作中人物への鍵——その4 (『コニングズビー』に関して) >

松村 昌家 大手前大学名誉教授

第三代ハーフォード侯爵

『コニングズビー』の主人公の祖父として登場するモンマス侯が、第3代ハーフォード侯(1777-1842)をモデルにして造型された人物であることについては、すでに述べた。



第三代ハーフォード侯爵

第3代ハーフォード侯爵といえば、美術館に関心のある人には、ロンドンのマンチェスター・スクエアにあるウォレス・コレクションの創設者の一人としてなじみのある人物だ。

母親のレディ・ハーフォードが「享楽の王子」と呼ばれた摂政皇太子（のちのジョージ四世）のミスレスであったという縁もあって、ハーフォード侯は、彼とも親しく、しかも彼に劣らぬほどの享楽の限りをつくした、典型的なリージェンシーの遊冶郎だったという見方も成り立つ。

多分にリージェンシーのダンディズムの流れを受けついでディズレイリも、当然この人物の存在に関心を向けていた。

彼はロンドンの社交界で注目されはじめた頃の1834年6月4日、レディ・ダッドリー・ステュアート邸に招かれて、初めてハーフォード侯と知り合った。その後ディズレイリとハーフォード侯とのあいだに直接の交流があったのかどうかは定かでない。

しかしディズレイリは、1832年にパリジャン・ダンディとして有名なドルセイ伯爵の知遇を得、1834年にレディ・プレシントンのサロンの仲間入りをするようになり、またロンドン一格式の高い社交場として知られるオールマックスでのデビューを果たしていた。

だから当時の上流社交界でとかく話題にのぼりがちであったハーフォード卿の行状について、おおよそのことは、彼の耳にも伝わっていたはずである。

そこで『コニングズビー』に戻って、モンマス卿が死んだあと、遺書をあけてみるとコニングズビーに贈られるはずだった遺産が、「補足書」によって、候がかつてある女優に産ませた私生児に贈るように書き換えられていたということを想起しよう。(本シリーズ第6回参照)

1842年3月14日付けで書かれたディズレイリの手紙は、この点で注目値する。

ハーフォードの遺書の件は、今なお果てしのない話題になっております。どうやら遺言補足書によって先に書かれていた遺言が取り消されて、彼の召使とクローカーにそれぞれ25,000ポンドを遺贈することになったようです。

(略) ジツイーがかつて彼女の母が企んだ毒殺からハーフォード卿を救ってくれたというので、15万ポンドが彼女に贈られることになったのです。

この手紙の内容が『コニングズビー』におけるモンマス侯の遺書の鍵となっていることは、もはや疑う余地がない。

文中のジツイーというのは、ハーフォード卿がかつてレディ・ストローンという、彼にとっては宿命の女に産ませた3人姉妹の一人で、名はシャーロット。卿は特にこの娘をかわいがり、ハンガリーの貴族ジツイー・フェラリスに嫁がせていた。『コニングズビー』に当てはめると、フローラになるであろう。

ついでに言うと、クローカーは、ジョン・ウィルソンという名のアイルランド人で、ハーフォード卿の広大な所有地を管理し、政治面でのアドヴァイザーの役割を果たしていた。モンマス侯に仕えるニコラス・リグビーが、このクローカーをモデルにして造型された人物であることは、すでに『コニングズビー』に関する「作中人物への鍵」でも指摘されているとおりである。卿の死に際しては、彼は6名から成る遺言執行者の1人としても指名されていた。

ハーフォード卿は、死ぬ間際まで放蕩三昧の人生を送り、金を湯水の如く浪費したにもかかわらず、約200万ポンドの財産を残していた。そして遺書の全文を読むのには、4時間を要したといわれる。上述のような補足書に不満をいだいたクローカーは、それを法廷闘争にまでもちこみ、枢密院で審議されたことが、チャールズ・グレンヴィルの『グレンヴィル回想録』に取り上げられているが、ここでは、そこまで立ち入る必要はないだろう。

以上で第三代ハーフォード侯爵が、モンマス侯のモデルになり、またサッカリーの『虚栄の市』に登場するステイン卿の原型にもなった理由がおわかりであろう。リージェンシーの放蕩貴族は他にも数々いたが、ハーフォード卿ほど奔放な生き方に徹した人はいなかったのではないか。

チャールズ・グレンヴィルは、「この世に彼ほど軽蔑されながら一生を送り、彼ほど惜しまれずに死んだ人はいなかった」と言っている。世間の人びとが彼の死に深い関心を寄せたのは、彼がどれほどの財産をもち、それをどのように処理したかを知りたい好奇心からであった、ともグレンヴィルは述べている。(つづく)

* ベンジャミン・ディズレイリ・コレクションは神戸女学院大学図書館本館に所蔵しています。